

大学生と幼児との世代間交流の重要性についての探索的研究

An Exploratory Study on the Importance of Intergenerational Interaction between University Students and Young Children

金 谷 有 子

KANAYA, Yuko

はじめに

本研究の問題意識としてあるのは、少子高齢社会において若者が子どもと接触することが若者にどのような発達をもたらすのか、またその発達のためにどのような支援や教育プログラムが可能かを探ることである。現代日本の若者は子どもとの接触体験や子育て体験が少ないこと、そのことが親となった時の子育ての様々な問題をもたらしていくのではないかということが指摘されている（原田、2006）。「子どもを育てる」ことを人間の生涯発達の中に位置づけて幼児について学ぶことを成人期のみならず、幼少期や青年期からの発達課題として捉えることが重要であるという研究もある（藤後、2005）。中学生、高校生の保育体験学習の効果についての研究（伊藤、2006）結果が示唆するように、親になる発達基盤は幼児期や児童期から準備されていると考えられる。この親性は自然に発現するものではなく、子どもとともにいることで養われていくものである。親になる前のさまざまな経験が必要なのである。

現代の「親性」を育む仕組みづくりとしては子育て支援が代表的なものであろう。生涯

発達過程におけるさまざまな子育て支援と
そのための教育プログラム（例えばカナダ、
トロントの親支援プログラム“Nobody’s
Perfect”）が開発されてきている。武田(2002)
は、トロントのさまざまな工夫を紹介してい
るが、親になる準備としての子育ての理解と
教育のなかで、親になる前に子育てに必要な
準備が不十分なために出てきている問題を4
つあげている。出産の知識不足、少子化、子
どもと接する体験の不足、男性の子育てから
の分離と無理解をあげている。親になる前の
準備教育の機会として、中学生のベビーシッ
タートレーニングと4歳から14歳の子どもを
対象にした親教育プログラム「共感の根」（自
分の感情を適切に表現したり、他人の感情を
適切に読み取る能力を形成し、他人に対する
共感性を育てていく）が紹介されている。現
在、日本においてもこの子育て支援のプログ
ラムが実践されている。

陳（2007a, 2007b）は、少子化問題を日本
社会の養護性形成過程の問題として考え、そ
の有効な促進は学校教育の使命であるとして
いる。子どもの数が減少し、地域では遊んで
いる子どもの姿が消え、地域の大人と子ども
も参加した子育ても存在せず、70年代から若

キーワード：世代間交流、養護性、大学生、乳幼児

Key words : intergenerational interaction, nurturance, university students, young children

者たちはほとんど子育てに参加せずに成人になると述べている。

養護性という用語は近年発達心理学の概念として知られるようになったが、英語の nurturance からきている言葉である。Erikson (1950, 1959) のライフサイクル論的発達理論によると、成人期の課題は次の世代を生み育てることであるので「世代性」という概念で表現されている。この「世代性」には親が子どもを保護して育てるために自分の資質・技能・創造性を十分に発揮して社会に貢献していくという意味がある。これは養護性に近い概念であろう。Fogel (1984, 1986) は、nurturance の発達についてその起源から言及している。彼は実証的な研究結果を紹介し、生涯発達過程の中で赤ちゃんへの興味や関心の男女差や世代差について言及している。しかし、発達心理学におけるこの分野の研究はまだ十分ではないと思われる。

養護性について日本での先駆的研究者である小嶋 (1989) は養護性を「慈しみ育てる心の働き」と定義している。小嶋 (2001) では「生きとし生けるものの健全な発達を促進するために用いられる共感性と技能」と定義されている。陳 (2007b) は、個人の属性としての養護性に言及し、「相手の健全な発達もしくは状況の改善を促進するために有益な態度、身体技術と知識」と再定義している。次世代育成能力という人間としての幅の広い特性として養護性や世代性を捉えることもできる。このような養護性は生涯にわたる過程であるが、学校教育はこの養護性形成に無関心であったと陳は指摘している。そこで学校教育の使命として陳が提案しているのは、現行のカリキュラムに子ども・子育てや人間発達の「座学」と、この「座学」の効果を更に向上

させるために並行して体験学習を実施することである。発達心理学におけるこの分野の実証的研究および教育プログラム開発と実践等の研究はまだ十分ではなく、今後も検討していく必要があると考える。

上述したような問題意識と先行研究を踏まえて本研究はなされた。目的は2つある。第一に、現在の大学生が過去に子どもと触れ合った経験はあるのかどうかを知ることである。大学生はどのくらい子どもを知っているのだろうかといった問題を探りたい。第二に、実際の交流の機会をもった場合、大学生は子どものイメージや子ども理解をどの程度持って臨んでいるのか、また、それが交流前と後とではどのように変化するのかを探っていきたい。さらにその変化を検討していき、今後の「養護性」の発達研究を世代間交流から検討していく可能性を探りたい。

1. 大学生はどのくらい子どもを知っているのか

大学生はどのくらい子どもを知っているのだろうか。乳幼児との遊びや世話の体験の有無を調べることからこの問題を探っていくことにする。

<方法>

乳幼児との交流経験についてのアンケート調査を大学生対象に2007年秋に実施した。保育系学科の大学1、2年生56名（男子19名、女子37名）および文科系学科の大学2、3年生73名（男子45名、女子28名）合計129名（男子64名、女子65名）が回答してくれた。質問の内容は、小学校、中学校、高校、そして大学までの各発達段階において乳幼児と遊んだことや世話をしたことがあるかどうか、またそれはどのような機会であったかについてである。乳

幼児との接触の機会として、学校の授業、ボランティア、地域の行事、近所の子ども、親戚の子ども、その他から複数選択してもらった。

<結果と考察>

小学校から大学までの4発達段階それぞれにおいて乳幼児との交流（遊びや世話）経験が「ある」と答えた割合の変化が図1に示されている。全体および男女とも小学校、中学

校、高校、大学と進むにつれて減少傾向となっている。また遊びや世話の経験がある学生の割合は女子学生の方が男子学生より多い傾向が推測される。しかし、図2が示すように各発達段階が進むにつれて減少するのは文科系学生であって、保育系学生は乳幼児との遊びや世話の経験がある学生の割合は高い水準で推移していることがわかる。

図3および図4が示すとおり、各学科の男

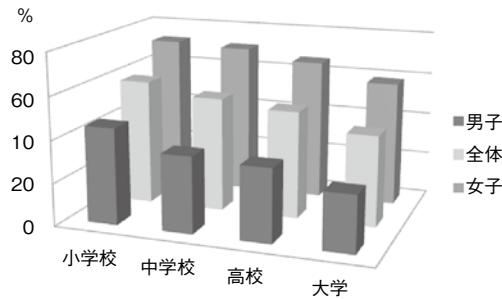


図1. 各発達段階において「乳幼児との交流経験が有る」と回答した学生の割合の変化

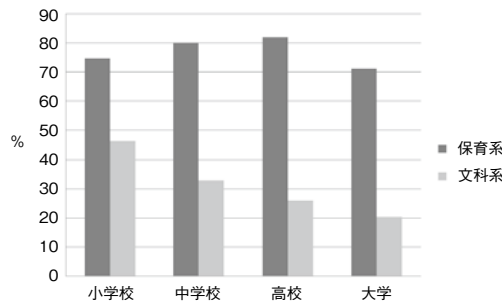


図2. 各発達段階において「乳幼児との交流経験が有る」と回答した学科別学生の割合

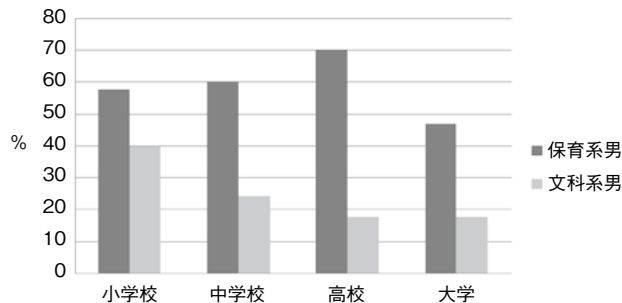


図3. 各発達段階において「乳幼児との交流経験有り」の学科別の割合の変化

女別の結果でも同じ発達変化の傾向があるといえる。図3が示唆するのは、保育系男子は高校時代の乳幼児との交流体験が現在の学科選択や将来の職業選択に影響しているかもしれないということである。保育系女子の場合はどの段階でも一貫して子どもへの関心が高いことがうかがわれる。これに対して、文科系学生は男女とも成長するにつれて、子どもとの接触が減少していくことがわかる。つまり、文科系学生と保育系学生の子どもの興味や関心さらに実際の接触経験がかなり早い時期から違っており、それが大学進学時の進路選択にも影響してきているとも考えられる。過去のこのような体験の違いが青年期以降の子育てにおける養護性あるいは親準備性の発達にどのように関わってくるのかは今後検討する必要がある。

図5は小学校、中学校、高校、大学と各段階における乳幼児との交流経験の機会がどこであったかを調べた結果である。この結果によると、小学校時代は近所の子どもや親戚の子どもとの遊びが大半を占めている。自分とほぼ同じくらいの子どもの遊べる機会があったということである。中学生になると近所の子どもとの交流は減り、学校の授業での意図的交流が増えている。高校生になるとボランティアの子どもも接触体験が増加している。これは自分で意識的、意図的に子どもとの触れ合いを求めて活動を行っているということである。大学生になると小、中、高に比べて交流の機会の全体数も減少していることがわかる。また学校での機会は学科によって異なっていることは前述した通りである。大学生時代は意図的に行わなければ乳幼児の世話

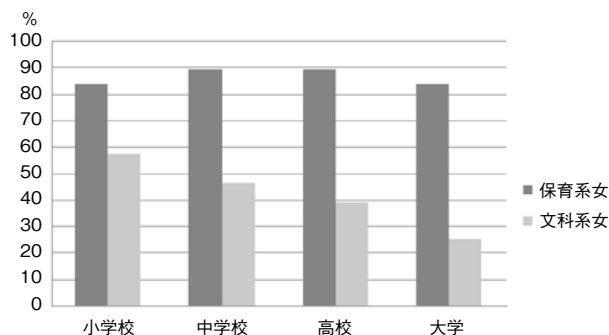


図4. 各発達段階において「乳幼児との交流経験有り」の学科別の割合の変化

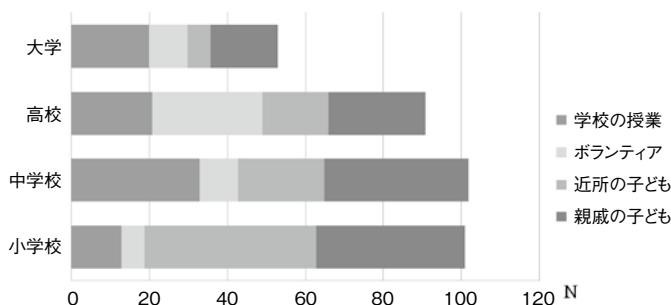


図5. 各発達段階における「乳幼児との交流経験」の機会

や遊びの機会が最も少ない時代といえよう。さらに地域での日常的で自然な交流の機会は小学校時代以降減り始め、高校時代以降はかなり減っていることから、地域とのつながりの希薄化の現状が示唆されている。

2003年の兵庫レポートでは乳幼児をまったく知らないまま親になる母親たちは26.9%であったと原田（2006）は報告している。原田はこのことが育児のストレスを高めていると考察している。次世代の親となる人たちに子どもとの遊びや世話の接触体験の機会を提供することが子育て支援、次世代育成支援、子ども虐待防止策として非常に重要と原田は主張しているが、本研究の結果からも同じことがいえるのではないかと考える。

2. 大学生と幼児との交流の実践例の検討

<目的>

大学生がいかに乳幼児との世話や遊びの経験が少ないか、またそのような機会が少ないかが前述のアンケート調査結果でも示唆された。武田（2002）も指摘するように、周囲に子どもがいなければ、子どもと触れ合う体験は得られないのは当然である。また、乳幼児との接触経験がなければ乳幼児がどのような存在なのかはわからないのも当然である。この第2の研究の目的は筆者が過去に行った大学生と幼児との交流体験の試みを分析し、その発達の意義を探り、今後の課題を見出すことである。

<方法>

本研究のデータは幼稚園の世代間交流、異年齢交流の実践プログラムの試みとして探索的に行われた体験から収集された。札幌市内の私立幼稚園側からの提案で札幌市内の心理

学科の大学生と幼稚園児との交流が企画された。大学2年生40名と引率教員3名が幼稚園に出向いて行った。2回の交流が用意された。1回目（2005年9月29日）は午前中1時間の自由遊びの中に学生が参加した。2回目（2005年10月20日）は年中の園児40名と学生全員が1時間の設定遊びに参加した。

参加した学生には交流体験後レポートを提出してもらった。今回はそのレポート記述を分析した。1回目の交流に関して子どもと遊ぶ体験の前と体験後における気持の変化を記述から分析した。1回目と2回目の両方に参加し、交流前後の気持ちや子どもや自己の認知について記述をしている学生13名（男7名、女6名）を分析検討した。子どもとの遊び経験をどのように認知し、自己と子どもとの関係をどのように評価しているかが分析の視点である。

<結果と考察>

交流前後で気持ちや子どもへの関心が変わっていないという記述をした学生と、変化したという記述をした学生がいた。伊藤（2006）の分析を参考にしてこれら学生を次のように分類した。最初から子どもへのNegativeな気持ちがあって、交流体験後もそのNegativeな気持ちに変化しなかった学生（NN型）は1名（男子）であった。これとは対照的に最初から子どもと遊ぶことが楽しみであると期待していて、交流後も予測通りPositiveな気持ちが持てたという学生（PP型）は女子1名であった。残りの11名の記述はNP型、np型、Np型とした。これらはNegative(N)あるいはややNegative(n)な気持ちからPositive(P)なものやややPositive(p)なものに変化していた場合である。分析対象の13名の記述からは

PositiveからNegativeな気持ちという逆の変化は見いだされなかった。変化したのは全体の約85%であった。このタイプの記述の特徴としては、交流前は楽しみだが不安だというアンビバレントな気持ちや、子どもとどう接したらよいかわからないといった戸惑いが表現されていることである。交流後は子どもへの理解、自己理解あるいは受容的態度といった側面が表現されている。気持ちの変化に焦点を当てて記述をまとめたのが表1、表2-1、表2-2である。記述の中に下線を引いて、それぞれの表現の型を示した。波線はPositiveな表現の場合、太い実線はNegativeな表現の場合、二重線はpositiveではあるが自己分析や体験への分析的ないし反省的表現の場合に使用した。

伊藤（2006）の中高生の保育体験学習の結果によると、「対子ども社会的自己効力感」と「子どもへの興味」、「子どもへの興味」と「保育体験学習への期待」とはともに有意な高い正の相関関係が見出されている。表1から3に示された記述からも同じような傾向がうかがえる。

子どもとの遊びや世話といった保育体験を中心とした教育プログラムの有効性を検討した研究（藤後ら、2005）では、3つの因子を見出している。「幼児の相手をうまくやれると思う」とか「小さい子どもの世話は自信がある」といった＜子どもとかかわる自信＞の因子、「保育園の前を通りかかると、のぞきたくなる」、「赤ちゃんに興味を持って見る」、「小さい頃から子ども好き」といった＜子どもへの興味・関心＞の因子、そして「将来、子どもをうまく育てるか心配」「子育てには、いろいろわずらわしいこともあると思う」という＜子育てへの不安＞因子である。また自尊

心については保育体験の有無による主効果がみられ、保育体験を経験しているものがそうでないものと比べ、「自信」の得点が高かった。教育プログラム前後により養護性の「自信」が増加して、自尊心の「否定」が低下した。言い換えると、自分は役に立たない人間である、だめな人間であるという思いが減少したという。本研究の大学生の記述にも子どもとかかわる自信、子どもへの興味・関心の記述が共通してみられる。交流前は子どもとの接触体験がほとんどない学生が多く、そのため子どもとどのようにかかわってよいか不安である学生がほとんどであった。しかし、「どのように遊ぶかは子どものほうから教えてくれた」、「子どものほうから一緒に遊ぼうと声をかけてくれてうれしかった。この子と作業をしてコミュニケーションがとれた」といった表現に代表されるように、交流のきっかけは子どもが作ってくれた。こうした経験は、子どもへの対応に自信をもつきっかけにもなり、大人の間関係とは異なる素直な子どもとの触れ合いを新鮮に感じ、自分のあり方を再認識することにもつながるだろう。大人として大学生が幼児を引っ張っていくというよりむしろ幼児の方が自分たちを受け入れ導いてくれると感じた学生は多かった。一緒に遊ぶ時の幼児の笑顔や表情や「また来て遊んでね」という言葉に出会って、自分は他者に受け入れられ、援助できる自信や喜びを感じた学生も多かった。交流前後でNegativeなままだった学生もいたが、このような学生には子どもとの交流が他者に援助できる自己との出会いの機会となるようにその後のフォローが大切であると考えられる。

子どもと接することは、子どものかわいさやいとおしさを実感するとともに、同時に思

表 1. 交流前後ともNegativeな記述の学生とPositiveな記述の学生

学生	交流前の気持ちや認知	交流後の気持ちや認知
1. H男 NN型	子どもが嫌い。理由は子どもはうさぎ、分別がないから。だからこの交流は憂鬱 (Negative)	子どもと積極的に接すること出来なかった。観察だけに終わった。子ども嫌いであるからだが、 <u>自分の消極的性格</u> によるものでもある。
2. M子 PP型	大学生になると高校生以下の子どもとなかなか触れ合う機会がない。今回の機会を <u>楽しみに</u> している。	園児たちから「こんにちは」と大きな声で言われ <u>照れくさい</u> 感じて <u>恥ずかしかった</u> 。抱きついてきた一人の女兒と砂場で遊んだ。なんとなく <u>懐かしく感じた</u> 。その後別の数人の園児も加わってみんなでケーキを作った。 <u>子どもは独創性が豊かだ</u> と感じた。 <u>いつも交流を持たない世代と交流することによって、感じ方や見方がずいぶん変わっていくものだ</u> と実感した。

表 2 - 1. 消極的あるいはアンビバレントな気持ち (Negative) の記述から肯定的 (Positive)、あるいは現実受容的な気持ち (positive) の記述に変化した男子学生

学生	交流前の気持ち	交流後の気持ち
1. N男 nP型	子どもと接する機会がなかったから、 <u>楽しみ</u> である反面どう接したらよいか戸惑い、子どもに好かれたいのではと不安	気にするほどではなかった。子どもの調子に合わせて <u>仲良くなれた</u> 。子どもの姿に <u>驚きとほほえましさ</u> を感じた。
2. S男 Np型	幼稚園児と接すること苦手。どう接しているのか <u>分からない</u> 。自分は背が高いので園児が怖がるのではないかと不安	しゃがんで子どもの視線と同じ位置になるよう心がけた。遊び方 (縄跳びの掛け声) <u>自分の時代と違ったので驚いた</u> 。 <u>考えすぎず自然に遊べたらよい</u> 。
3. Y男 NP型	子どもたちとどのように遊んでいいのか、少し不安。	子どもたちのほうから声をかけてくれて <u>不安はすぐに吹き飛んだ</u> 。子どもと一緒に遊びだしてからも <u>子どもの積極的態度に助けられたし、感心もした</u> 。
4. T男 Np型	仲良くなれるのか不安。	子どもは話しかければすぐ答えてくれ、 <u>仲良くなれた</u> 。思った以上に <u>楽しかった</u> が、1時間はとても <u>疲れた</u> 。 <u>幼稚園の先生はタフだ</u> と感じた。
5. A男 Np型	上手くやれるのか不安。子どもに好かれるのか、一緒に遊べるのか、 <u>けがが心配</u> 。	人見知りする子どもも少なく <u>仲良く遊ぶ</u> ことができたと思う。けがもなく本当によかった。ただ自分の体力は、子どもと視線をあわすために常に <u>屈んでいてつらかった</u> 。
6. H男 Np型	幼稚園児と触れ合う機会はずっとない。 <u>園児らの望むことや日常を知らない</u> 。	初めてにしてはまあまあ複数の園児と遊ぶことができた。子ども同士のけんかへの対処や子どものことばの意味の理解が <u>遅れてしまったことなどはやや悔やまれる</u> 。次回の交流も楽しみである。

表2-2. 消極的あるいはアンビバレントな気持ち（Negative）の記述から肯定的（Positive）、あるいは現実受容的な気持ち（positive）の記述に変化した女子学生

学生	交流前の気持ち	交流後の気持ち
1. S子 np型	園児と遊ぶというのは多少緊張するが、 <u>気は楽である</u> 。小さな子どもと遊ぶ機会はないので、 <u>楽しみながら臨みたい</u> 。	子どもの元気な走り回る姿は「 <u>アー、懐かしいなー</u> 」 <u>自分が園児だった頃を思い出させてくれた</u> 。最初は走り回る子どもにどうしていいか、戸惑った。子どもの動きについていくのは大変。子どもの声は聞き取りにくく、何を言っているのかわからず、 <u>理解できずあせった</u> 。次回は <u>もっと遊べたら</u> と思う。
2. T子 np型	「ちゃんと遊べるか」、「どんな遊びをしようか」 <u>不安とワクワク</u> が入り混じていた。	子どもたちにあいさつされた途端、 <u>不安は全くなくなった</u> 。2,3人の女児のごっこ遊びに参加して子どもたちの行動を観察していると、 <u>自分の小さい頃のことも思い起こさせた</u> 。遊びの中でけんかも生じてどうしていいかわからなかった。
3. J子 Np型	戸惑いと不安。小さい子と遊んだことがほとんどないので、正直どう接したらよいかわからない。子どもたちのパワーに自分がついていけるか <u>心配</u> 。	遊んでいる子どもたちに近づいたり話しかけたりしたが、なかなか仲間に入れなかった。積極的にならなければいけないと思いボール遊びに加わりたと言ってみると、一人の女児がボールをパスしてくれた。本当に心からうれしかった。この女児と仲良くなりたいと遊びながらいろいろ話しかけてみたが、最初はギクシャクして、話が進まず焦った。途中から女児のほうから話をしてくれて非常にうれしくなった。
4. C子 NP型	ふだん、小さな子どもと触れ合う機会が少ないこともあり、子どもたちとどう接したらよいか、正直、 <u>不安</u> でしかたなかった。	「一緒に遊ぼう」と声をかけたら笑顔で頷いてくれた。遊んでいくうちに不安な気持ちや迷いはすっかり消えた。子どもと話をし、 <u>笑い合いながら遊んだ</u> 。子どもが <u>もつ不思議なパワーが素晴らしい</u> と思う。
5. E子 np型	小さな子どもが大好きなのでとても <u>楽しみ</u> である。子どもたちとどのように接すればいいのか、子どもたちと仲良く遊べるのかという <u>心配</u> もある。	初めは心配していた通りどのように遊んだらよいか迷ってしまった。しかし、どのように遊ぶかは子どもの方から教えてくれた。子どもの笑顔を見ていると、いくら疲れていても子どもと触れ合っていたいという気持ちになった。

い通りにならない難しさや自身の幼少時のNegativeな思い出を想起する場合があると伊藤（2006）は述べている。このような葛藤は、ある個人にとっては成長につながる場合もあるが、他の個人にとっては自分だけの解決が難しいほど負担になる場合もあるという。伊藤（2006）は、このような場合は、保育士を中心とした子どもに関する講義やグループ討議の場面を用意するなどのフォローをすることが葛藤の解決につながり、最終的に葛藤が意義のあるものとしてとらえなおすことができるのではないかと述べている。

<まとめと今後の課題>

最後に大学生の子ども接触経験のアンケート調査と大学生と幼児との交流体験の実践結果という2つの結果から得られた知見と示唆される今後の問題点を3つの観点から考察していきたい。

第一に、青年後期から成人前期の大学生を対象とした乳幼児との接触体験が生命を慈しみ育てる養護性の発達に効果があるであろうということである。さらには本研究の結果から子どもとの接触の機会が少ない大学生時代に乳幼児と遊んだり、世話をしたりする体験

学習プログラムは、子ども理解のみならず自己理解も深めていくという効果も示唆されている。今後は子どもへの接し方を学ぶ養育能力向上プログラムを継続的に実施する方法を検討していくことが重要である。

第二に、世代間交流の意義と方法について検討する必要があるという点があげられる。世代間交流といった場合、高齢者へ焦点化した研究が多い。高齢者と子どもとの交流は幼稚園や保育所、小学校、中学校などで実践されている。問題点として指摘されているのは、このような交流が単発的な体験にとどまっているということ、子どもが高齢者を「慰問」する一方的な関係ではなく、より対等で、相互交流的な関係であることなどである。

2006年8月に日本で開催された世代間交流国際フォーラム(2006)では、世代間交流の教育プログラムとその実践が報告されている。金田利子は、保育園・幼稚園や地域における実践や短大保育科の学生たちと共に大学に世代間交流広場を立ち上げた実践を報告している。そこでは学生たちにどのような力が育ったか、世代間交流を実践する専門家養成について提案している。

第三に、異年代交流の体験と対人関係能力の発達について生涯発達心理学的観点から検討することが必要であるということである。異年齢の子どもとの関わりの希薄化が、子どもたちの社会性の欠如や耐性の低下の一因となっているといわれる(藤後、2005;伊藤、2006)。異年齢集団の中で、子どもは自分の位置や役割を知り、他児との連帯意識を高めていける。幼小中連携教育においては、部活を通して異年齢交流を体験した生徒は異年齢集団の中で自己認識や帰属意識を発達させる効果があると報告されている。

今後は、世代間交流の優れた実践事例を分析し、養護性発達のための大学での教育プログラムやその他の方法を構築していくという理論と実践の統合を検討していきたい。

参考文献

- ジャニス・ウッド・キヤタノ(著)三沢直子(監修)
杉田真・門脇陽子・幾島幸子(訳)2002 親教育プログラムのすすめ方 ひとなる書房
- Chen, S-J. 2007a The Changes in Developmental Niche: Nurturance Formation in Young People of Japan, *Annual Report: Research and Clinical Center for Child Development, Graduate School of Education, Hokkaido University, 29, 25-33*
- 陳省仁 2007b 現代日本の若者の養育性形成と学校 子どもの発達臨床研究 1:19-26
- Erikson, E.H. 1950 *Childhood and society*. W. W.Norton
- Erikson, E.H. 1959 *Identity and the life cycle*. International University Press.
- Fogel, A. 1984 *Infancy: Infant, family, and society*. West Publishing Company.
- Fogel, A., & Melson, G.F Eds. 1986 *Origins of nurturance*. Lawrence Erlbaum Associates.
- 原田正文 2006 子育ての変貌と次世代育成支援—兵庫レポートにみる子育て現場と子ども虐待防止 名古屋大学出版会
- 伊藤葉子 2006 中・高校生の親準備性の発達と保育体験学習 風間書房
- 小嶋秀夫 1991 親となる過程の理解 母性の心理・社会学 医学書院
- 小嶋秀夫 2001 心の育ちと文化 有斐閣
- 武田信子 2002 社会で子どもを育てる 平凡社新書
- 藤後悦子、岡本エミ子、山本和子 2005 保育体験を中心とした教育プログラムの有効性 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要 第5号 57-68